

2014 年度 聖路加国際大学大学院博士論文要旨

聖路加国際大学大学院看護学研究科

博士後期課程 吉野純子

論文題目

首都圏在住の定年退職した男性が地域とのつながりを構築していく理論の生成

目的

定年退職した男性が、地域との関わりを通して地域の中で家族以外の新しいつながりをどのように築いていくのかを記述し、地域とのつながりを構築していく理論を生成する。

方法

本研究はグラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた質的因子探索型研究デザインである。研究対象者は、首都圏在住の完全退職している定年退職男性で、家庭以外で家族以外の他者との交流がある活動を継続的に参加している男性 15 名である。データ収集は、2014 年 3 月～2014 年 7 月に半構成的インタビューを用いて実施した。本研究は、聖路加国際大学研究倫理審査委員会の承認を得て行った（承認番号：13-070）。

結果

定年退職した男性が地域とのつながりを構築していく過程は、退職によって【自己の存在価値が脅かされる】状態に置かれた男性が、【地域との接点づくりに消極的である】傾向を有しながらも、【今のところ安定した生活基盤がある】現状の中で【男性ならではの物事への対処術を用いて関わる】ことで、《自己の存在価値を模索する》ことから始まっていた。そして、定年退職後の男性の地域とのつながりには、趣味等の個人的な関心事を通して【自己への誇りを再獲得する】、【個人的な関心事の空間の中で満足する】ことで、《個人として在る》状態で満足している男性と、地域の中での日常的な関わりや自治会等の地域活動への参加を通して、【自分が生活者であることを実感する】気付きと【地域の中で共有できる視点をもつ】ことで、自分の存在価値を地域との関係性の中に見出し【住民意識が自己の一部となる】段階に至って、住民として《地域と共に在る》意識へと変化していく男性がいることが見出された。

結論

定年退職した男性にとって地域とのつながりが構築されていくということは、『地域の中で共有できる視点を持つ』ことをコアカテゴリーとして、《地域と共に在る》状態に目覚めていく過程であった。この過程は、退職した男性が、《自己の存在価値を模索する》中で、趣味などの関心事を通して《個人として在る》空間を作る一方で、地域の住民や活動に関わることで、自分が地域の中で共生している存在であることを認識し、地域の一員として《地域と共に在る》意識へと至る、心の在り方のダイナミクスとして理論構築された。